人口減少に伴い野生動物との軋轢が激化する農村（山形県鶴岡市田麦俣地区）。被害対策の先にある農村の未来を考える創造力が求められている

江成広斗
山形大学・「野生生物と社会」学会 理事

巻頭エッセイ ESSAY

試される創造力

農山村の役場に出向くと、生活や生業にかかわるさまざまな分野の担い手の募集や育成に関するチラシが数多く掲示されていることに気づく。都市への人口流出によるこれまでの人口減少（社会減）だけでなく、死亡率が出生率を上回ることによる新たな人口減少（自然減）が全国的に顕在化しはじめた日本において、「人の不足」による危機感がそこかしこに漂いはじめているのだろう。

そもそも、人口減少はなぜ「危機」と捉えられるのだろうか。社会の成熟化に伴う人口減少は想定外の異変ではなく、以前から予想されてきた想定内の社会変化であったはずだ。「危機」と感じるのは、詰まる所、人口減少に対する対処の遅れとしかいいようがない。

「野生生物と社会」にかかわるさまざまな社会・環境問題においても、人口減少という未曽有の社会変化は問題の構造を複雑化させ、しばしば解決を困難にさせてきた。たとえば、人と大型動物との間に生じる軋轢問題はその典型だろう（「野生生物と社会」5巻1号の特集参照）。急激な社会変化の時代に生きる私たちにとって、これまでの日常の延長線上に未来を描くことは難しくなっている。このことは、「解決とは何か」についての具体的なイメージを描き、目指すべき未来（ゴール）として社会で広く共有していくことの困難さを意味している。「野生生物と社会」において、知識の積み上げによって達成される従来の科学だけでなく、創造力を起点にした新たな科学の挑戦が求められているのかもしれない。